

番号	35	名称	明神下 神田川本店	
指定日	平成 15 年 6 月 9 日		所在地	外神田二丁目 5 番 11 号
設計者	不詳		竣工	昭和 27 年 (1952)



歴史・文化的特徴

江戸末期の文化 2 年 (1805) 創業の、うなぎ蒲焼の老舗。幕府の賄い方に勤めていた初代が、流行りたての鰻の蒲焼きに目を付け、万世橋近くで商売をはじめたのが成り立ち。

文政年間に平賀源内が「土用の丑の日にうなぎ」のキャッチフレーズを考えたのはこの店の依頼だといわれている。落語家の 8 代目桂文楽の「素人鰻」という落語の中に店名が出てくる。文豪・夏目漱石も正岡子規と共に訪れている。

意匠・構造の特徴

下町ではほとんど見られなくなってしまった「粋な黒塀、見越しの松に～」という町屋の姿を残している。

瓦屋根・モルタル塗り外壁と、どこにでもある外観だが、内部に戦前期の和風建築の技術の継承がうかがえる。

周辺景観との関係

秋葉原電気街のすぐ脇、外堀通り沿いにある、黒塀に囲まれた町場の料亭。かつての明神下の雰囲気を残す稀少な景観である。